



第429号 「がんばろう、日本！」 国民協議会 機関紙

発行所「がんばろう、日本！」 国民協議会 発行人 戸田政康 編集人 石津美知子 http://www.ganbarou-nippon.ne.jp

1部 300円 定期購読 半年2,000円 一年3,500円

今号の紙面

- 2面 一灯照輝(地方議員のコラム) 3面 報告/小豆島 長岡京市長選 田中会 4-6面 「香港の民主化運動に思い」 山田昌弘・中央大学教授 田中会 6-10面 「地域から選挙を語る」 柿沢未途・衆院議員

分断と対立ではなく、連帯と協働の当事者性と関係性へ

「空虚な選挙」の後にこそ問われる、当事者性と関係性を創り出す多様な場づくり

過去最低の投票率となった年末総選挙。ある人にとっては「もはや過去となりある人にとっては「虚しさ」だけが残るが、ある人にとっては空虚な選挙」に代わる何か、の始まりとなりつつある。(沖繩からは、選挙一市長選、知事選、国政選挙一で繰り返された民意が一顧だにされないこの国に民主主義はあるのか、という怒りを伴って)

「日本の未来を決める大事な選挙！大切な一票！その通り。でも、わたしたちはその大切な一票をどこに入れたら良いのか」と、投票日まで考えに考え抜いた有権者は、今回の総選挙ではこれまで以上に多かったのではないかと。津田大介氏が開設したネット上のメディア「ポリタス 総選挙特集」http://politass.jpは、選挙期間中に305万ページビュー、146万人の訪問者を数えたという。掲載記事のうち二番目にアクセスの多かった「どうせいつか」「一羽の鳥にいつて(あらゆる選挙にさせて)」は5万以上シェアされ、全国紙にも転載された。(渡り鳥が飛

び立つ瞬間は、「誰か」が決めるのではなく、「私」という一羽が決める。「政治不信」というある種のキャンペーンで無力さを刷り込まれた「私たち」のなかで、「私」が変わることによって「私」たちが変わる。(と) 確かにそれらはまだ小さな兆し、微かな羽音にすぎないだろう。しかしそれに耳を傾け、最後まで考えようという民意にメッセージを届けようとする人々は、「今回はこれまでになく、選挙後のほうが反応が深まっている」という手ごたえを感じ取っている。

論が割れる争点/引用者)をあえて掲げようとはしない。そして、政権担当能力を示さなければ得票できない野党勢力は、合意的争点をめぐる対立軸でもってしか与党と対峙できないため、結果的に選挙で問われることは限られてきてしまつたのである。簡単にいってしまうと、政党がもはや特定の世界観でもって選挙を戦つたのではない、さらに財政赤字とグローバル化によって国内政治が空洞化している以上、選挙で決することのできるものは、少なくなつてきている。フェイクな争点設定でもって権力を維持するための選挙は、さらに空虚なもので、そして政治からの問いかけが空虚ならば、答えも自ずと空虚なものにならざるを得ない(吉田徹「世界」2月号)

しまえば、そこで生まれるのは、政治では結局何も達成し得ないという敗北主義と政治不信かあるいはその反動としての極端な政治化、つまり選挙で勝てば何でも可能にしてよい、という選挙至上主義でしかない。有権者の高度の政治不信と、権力の恣意的な介入は、実際には相互に共犯関係がある。そこには、政治の重力を選挙に求めすぎたマスコミも加担している(吉田 前出)

「選挙政治やその結果に政治が持つ意味合いの全てを込めてしまえば、そこで生まれるのは、政治では結局何も達成し得ないという敗北主義と政治不信かあるいはその反動としての極端な政治化、つまり選挙で勝てば何でも可能にしてよい、という選挙至上主義でしかない。有権者の高度の政治不信と、権力の恣意的な介入は、実際には相互に共犯関係がある。そこには、政治の重力を選挙に求めすぎたマスコミも加担している(吉田 前出)



# オリーブの島の百姓日記

③

## 一持続可能な農業経営の課題一

昨年を振り返って、我が家の農業経営もいよいよ異常気象と鳥獣被害が深刻化してきたなあという実感を持っています。

今回は、昨年を振り返り農業経営をめぐる課題について報告します。

### 異常気象との闘い

最近では毎年のように異常気象との闘いになっていますが、特に昨年は8月の長雨・日照不足が深刻でした。8月上旬だけで375ミリの降水量があり、日照時間は平均が72時間なのに15時間しかありませんでした。またこの数年は、果樹栽培にとって重要な春先からの開花・受粉・結実に向かう時期の天候不順（遅霜や多雨、逆に異常乾燥等々）に悩まされています。

地球温暖化は単純に夏の猛暑・干ばつだけでなく、様々な影響を生じさせています。（春先の天候不順は北極の水河溶解による海水温の低下によるとも言われています。）

そんな中、昨年12月に興味深い報告が中央農業総合研究センターから出されています。日本の土地利用型作物の生産性が一九八〇年代以降停滞が続いており、収量水準を伸ばしている世界各国（特にアジア諸国や南米の増収率が高い）との間に大きな格差が生じていると指摘されています。

「面積は小さいながらも高い技術力と集約的な栽培管理で高収量を保持する日本農業」という従来からのイメージが、根本から覆される内容です。報告はこれから研究開発の強化や新技術の普及、技術進歩の加速化などを検討課題に挙げられています。

しかし、単に研究や技術の問題ではなく、もっと構造的なかつ哲学的な問題かなと思います。日本の農業ではかつてから「農地も農作物である」という学説が取られています。農地は一朝一夕にできるものではなく、長年の土づくりによって維持できるもので、山林化した荒地を重機で開墾し堆肥を施したら畑になるというものではありません。小豆島でも、オリブブームで多くの企業が参入して荒廃農地を開墾してオリブ栽培を始めていますが、面積拡大に比べて収量が伸び悩んでいます。

さて、昨年にかえて、8月時点ではミカンも酸度も低く品質的には危機的状況でしたが、収穫期を迎えると酸度も平均一程度以上になり、好評をいただきました。これも長年の土づくりと、自然や植物の生命力かなと思います。

土づくりは単に土壌分析をして、不足成分を補っていくというだけでは、圃場の日当たり、日照時間、排水等を熟知しながら、堆肥や肥料の施用時期や量を決めていくものであり、これは長年の経験と勘によるしかないと思われていますが、こういうことが軽んじられてきているのでは、と思います。

### 鳥獣被害との闘い

全国でも深刻になっていますが、小豆島でもシカ、イノシシ、サル、そして果樹の場合はカラスの被害が深刻になってい

ます。特に昨年は台風で山が荒れ、9月以降頻りにイノシシやサルが畑に入るようになりまし。すでにどの田畑もネットや電気柵、ワイヤメッシュで囲まないと、栽培不可能になってきています。山あいの集落では、家庭菜園まで全滅のところもあります。

原因ははっきりしています。生息頭数が増え過ぎていることもありますが、里山に人が入らなくなったり、山が荒れ、餌がなくなっているからです。野生動物のテリトリーと農地の緩衝帯として里山があり、棲み分けができていたのが、今は区分がなくなっています。

対策には、多くの補助事業が組まれているが、捕獲、駆除、侵入防止資材に偏っていて、本質的な原因に切り込むような施策はあまり見当たりません。私自身も、できる範囲の侵入防止策をしていく以外にないかなと思っています。このままでは持続的な営農が難しくなるところまで来ています。里山の再活用や野生動物と農業の共存の具体策を探っていくかなければ、と思いはじめています。

なかなか難しい課題ですが、個別我が家に限れば、風呂は新で沸かし、水道も引かず、飲料水は井戸水、トイレや洗濯は農業用水を家まで引いて使っ



写真・防獣ネットで囲ったわが家のみかん畑 (畑口欣哉)

## 「誇り」と「自信」を深めた市長選

### 中小路健吾同人、長岡京市長に初当選



光景も。これとは対照的であったのが、元市議会議長の富岡氏。推薦をうけた自民・公明両党の国会議員が多数を援するも（最終盤には、佐藤ゆかり衆議や谷垣自民幹事長の姿も）、昨年末の総選挙の自公比例票（一万三千余）に及ばなかった。当選の挨拶の中で、中小路氏は「市民と議会、職員との対話を大切にする行政運営を行い、すべての力を結集して長岡京市の新しいステージのまちづくりを進めていきたい」と抱負を語った。

### 市長選挙は、まちづくりの合意形成プロセス

「市長選挙は、このまちの将来について、市民みんなで一定の合意を得ていく大切なプロセス、大事な機会です」（プレス（第二号））。

今回の長岡京市長選挙での「みんなで創るチャレンジ長岡京【チャレンジN】」の四ヵ月の活動は、このプロセスそのもの。

中小路健吾氏が長岡京市長選挙への出馬表明をしたのが、昨年9月13日の「中小路健吾府政報告会」の場。「チャレンジ」はここから始まった。

【チャレンジN】の設立趣意書は、長岡京市がどうなっており、どうなるかを、次のように明らかにする。

長岡京市は市制施行以来40年あまり、大きな発展を遂げてまいりました。高度経済成長期以降の人口急増や、それに伴う学校や福祉施設などの公共施設の建設、住宅開発の促進、福祉や医療の供給体制の整備が進められました。とりわけ近年、

JR長岡京駅前再開発事業や、第二外環状道路の完成、阪急西山天王山駅の開業など、社会基盤整備が整い、交通の利便性が飛躍的に向上いたしました。

一方で、こうした都市機能全体が「老化現象」を起す時期にさしかかっていることも事実です。これから先、10年、20年の長岡京市のまちづくりの課題を考えた場合、人口構成の高齢化への対応、公共施設の老朽化対策、今後増加が予想される空き家対策、子育て支援や教育環境の充実により、若い世帯の定住・誘致の促進や福祉・教育などの行政施策が今日の課題に適しているかどうかの再点検に取り組んでいかなければなりません。

このまちの将来には、たった一つの「正解」があるわけではありません。「まちづくり」を進めていく上で大切なことは、「まちづくり」の方向性やあり方を、「他人事」ではなく「自分事」と考えていくことです。「私たちすべての市民が将来をともに考え、そして創り上げる。」それが、市民共有の「正解」に辿り着く方法です。私たちが「みんなで創るチャレンジ長岡京」は、そんな「まちづくり」をみなさんとともに進めていくために設立いたしました。みなさんとともにチャレンジ！10年後を見据え、未来に希望の持てる次のステージへ。新しい「まちづくり」にともに取り組みましょう。平成26年10月

### Nに込めた想い

私たち「みんなで創るチャレンジ長岡京」は、中小路健吾市長候補を先頭に、「チャレンジN」長岡京を次のステージへをキーワードにこれまで活動してまいりました。「N」は「長岡京 (Nagasaki)」を表現しているのもちろんですが、次の (Next) 新しい (New)

「ステージへ」などの意味や想いも込めています。それは、これまでの市政を否定するのではなく、それらをしっかり継承しつつ「未来への新しい一歩を踏み出す」事を意味しています。選挙期間が始まる前、中小路健吾は「みんなで創るチャレンジ長岡京」の活動の一環として「長岡京を・・・する」というポスターを掲げながら、駅や街頭で話をさせていただきました。中小路健吾は、この「・・・」の部分をごの選挙戦の中で絶えず訴えてまいりました。もちろんそれは、今回掲げている政策に盛り込まれています。しかしそれだけでは不十分なのです。私たちの会の名前は「みんなで創るチャレンジ長岡京」このメッセージを響かなくなった皆さんにも、他人事ではなく自分ごととして、この「・・・」に何が入るのか、考えていただきたいのです。中小路健吾は、次のステージへ向けて、すでにスタートを切りました。皆さんには、ぜひ共に考え共に歩いて欲しい・・・私たちはそう考えます。

### まちづくりシンポジウム・チャレンジ政策ミーティング・街頭活動

11月から12月にかけて、市内10箇所の公民館や自治会館で開催した「チャレンジ政策ミーティング」を軸に、ミニ集会や街頭でもまちづくりの政策課題



を共有する活動が随所で精力的に展開された（この過程を通じて当初の「政策集」はバージョンアップされた。12月21日には「チャレンジまちづくりシンポジウム」を開催。当日は、300名を超える市民が参加し、熱気あふれるシンポジウムとなった（あまりの人の多さに、会場に入り切れない人も）。この会は、「長岡京市がこれから直面する現実や課題について、一人でも多く市民の皆さんと共有したい」という中小路氏本人の強い思いから、選挙に向けた「決起集会」とはせず、「くれないものなだり」からあるもの探し・「へ」のテーマでのシンポジウムに。「このシンポジウムをきっかけに、これからの長岡京市の市政運営やまちづくりへの関心を高めていただければ、主催者としてこれ以上の幸せはありません。皆様から頂いたお話が、そのまま長岡京市に転用できる内容ではなかったかも知れませんが、そこには何らかの「まちづくり」のヒントが詰まっていたと確信しております」(Nニュース)

選挙期間に入っても、引き続き街頭活動や連日の個人演説会、そして最終日のJR長岡京駅西口歩道橋をうめぐす150名以上の市民に見守られながらの大演説会と、目を重ねることに共感と連帯の輪を広げていった。

選挙後の今日も、「このまちの将来」について、市民みんなが合意形成をすすめていくプロセスは、さらに広がりを見せ続けている。今回の市長選挙を通じて「誇り」と「自信」を深めたのは、中小路健吾新市長と「みんなで創るチャレンジ長岡京」のみならず、ほかならぬ長岡京市民そのものであったように感じる。

(杉原卓治)

□第145回 東京・戸田代表を囲む会□

# 香港の民主化運動に思うこと

## ―日本の若者の政治離れと比較して―

ゲストスピーカー 山田昌弘・中央大学教授

■香港で九月末から続けられてきた学生を中心とした民主化運動。中心街の道路に作られたバリケードが、いよいよ明日(十二月十一日)には強制撤去されるといわれるなかで行われた「囲む会」。ゲストスピーカーは、研究休暇で香港に滞在中で、一時帰国されている山田昌弘・中央大学教授。

### 公共香港の概要

一時帰国なので、ここしか日程がとれないということ、今日にしていたら、総選挙の時期に重なってしまいました。

私は香港の専門家ではなくて、香港で活躍する日本女性の調査に行っているんです。日本では女性差別が多いので、香港に来て仕事をしながら現地の人と結婚して、子どもを育てている、そういう人たちを調査しています。

さらには最近アニメとかAKBとか、そういうものが香港の若者の間に大人気なんです。香港コンサートのチケットがネットで一時間で完売とか、コ



山田昌弘 (やまだ まさひろ)

#### 中央大学教授

1957年生まれ。東京大学大学院博士課程単位取得退学。東京学芸大学教授を経て08年より現職。家族社会学、感情社会学、ジェンダー論。東京都児童福祉審議会委員、内閣府・国民生活審議会委員などを歴任。「パラサイトシングル」「希望格差」など、戦後家族モデルの崩壊や、若者の二極化などについての論考多数。

ミックマーケットに行くと、日本のアニメの二次創作をしている若者がたくさんいたり。今や日本は経済で有名な国じゃなくて、アニメやコスプレを輸出しているようなところもある。そういうものになぜ魅かれるのか、ということも調査しています。

とはいえ、私が研究休暇で香港にいた間に大きな運動が起こりましたので、週に一回くらい現場に足を運んでいます。ただ私は広東語が全くできないので、主に日本語が分かる香港の若者と話したりして、様子を見てきました。

そこで今日は話題提供ということ

私が見た香港の今の政治状況と、それに引きかえ日本の若者はどうか、ということをお話したいと思います。

香港の人口は、七十五万くらいです。ただ香港人の定義って、すごく難しいんです。国籍とは別に、七年住んでいたら香港の永住権がもらえます。その永住権のある人が香港人ということ、とりあえず今香港に住んでいる人たちが七百万人程度、そのうち中国籍の人は五百万人くらいでしょうか。もちろん私のように一年行っている人とか、二、三年行っている駐在員なども何十万人もいます。

歴史的には、ご存知のようにアヘン戦

### 中国本土との関係

#### 一国二制度と疑似国境

レジュームには「疑似国境」と書きましたが、日本の国境よりもはるかに厳密です。もちろん通貨は独自ですし、財政は独立しています。香港の一人当たりGDPは日本を上回っています。ある香港人に「東京の一人当たりGDPの方が高いだろう」と言われたんですが、東京の稼いだお金は地方に回るけど、香港の稼いだお金は中国大陸にはまったく還流しないので、豊かさを享受しているということですね。

財政は独立していて、確か数年前には税金が余ったので、一人あたり何万円かをいゆる戻し税をしたこともありま

す(1894)でイギリスに割譲されて、アヘンの積み出し基地になってから発展が始まった。一八九八年には大陸側の広いところ(新界部分)を中国から租借した。九十九年間の租借ということで、一九九七年に中国へ返還されたわけです。

その間、一九四一年から四九年までは日本によって占領されました。今でこそ日本の評判は悪くないんですが、昔から住んでいる日本人にインタビューしたところ、やはり戦後しばらくの間は日本人であること隠して生活していたという方もいらっしやいます。若い人はもう「関係ない」と思って香港に行きますが、親戚や先祖様を日本人に殺された人はまだまだいらっしやるので、大いばりで日本人だと言えないところは、まだあります。

一九八四年、鄧小平とサッチャーの合意によって返還が決まるんですが、その後天安門事件があったりして、もめたりもしました。とりあえず九七年に返還され、「一国二制度」といって、返還後五十年はそのままの制度であるということになりました。

で、今なら私ももうえるはず。一年間の居住権がありますので、それくらいの大盤振る舞いです。

私が香港に働きに行くのは自由なんです。中国大陸の人は香港に勝手に働きに行けないんです。すごい制限がある。例えば香港では月に四、五万円、一人、メイドさんを住み込みで雇えるので、フィリピン人のメイドさんが四、五十人いるんですが、中国人のメイドさんはいないんです。大陸から呼んじゃいけないんです。それくらい制限がある。

また他の国の場合はビザはいらないんですが、中国から香港に行く時は大使館

にビザを申請しなければいけない。このようにある意味では、本当の国境よりも強い国境です。

もちろん香港には言論の自由があるし、インターネットも自由に見られます。中国に入った途端、インターネットの接続は自由にはできなくなるというか、見られないサイトがたくさん出てきます。法律もイギリス法というか、コモンウェルス法が適用されます。そういう点だけ見れば、「一国二制度」になっているんですね。

しかし中国本土は完全中央集権で、地方自治という概念がないことがよくわかりました。じつはこれは宋代から千年くらい続いているわけですが、地方のトップは必ず中央から派遣されて、地元出身の人は絶対にトップには据えない。勢力を蓄えて地方勢力になっては困るので、宋、元、清、そして中国共産党政権に至るまですべて踏襲されています。

つまり政治トップは党書記局で、行政トップは行政長官とか知事とかですが、上の方は全部中央が派遣します。そういう

### これまでの、香港における民主化運動

民主化運動については、「香港人」とは何か」というのが難しいところなんです。あなたが中国人ですか、香港人ですか」と聞いた時に、この民主化運動が起こる前は、「中国人」というのもかなりありました。ただ「香港人」でもあり、中国人でもある」というのが一番多い回答で、「香港人である」という回答も結構あります。

特徴は広東省の広東語と繁体字、英語も併用されるということです。香港のほとんどの人は広東語しか喋れないと言って、主に広東語を喋る。返還以来、いわゆる北京語(中国語)と言われるものを義務教育にしたんですが、私の会った若い人は、「学校で習ったけど、もう忘れちゃった」と。

字というか書き言葉は一緒なので、そ

う意味で、自治という観念がおそらくないですね。自分たちの住んでいる地域を自分たちで治める、そのリーダーを選ぶという選択肢は全くない社会。その中で香港は例外なんです。

もちろん選挙というの基本的にもありません。中国からの留学生に「選挙、やっただことある」と言ったら、小学校の学級委員から、学生の自治会長から、すべては上の指名で決まるので、選挙で選ぶという概念がない。中国人留学生が日本に来て一番興奮したのは、AKBの総選挙なんですって。つまり自分が推した人が当選して、十八人の中に入れる、「こんな面白いことはない」と。

もしかしたら、AKBの総選挙が中国を変えるかもしれないとか。自分で代表を選ぶという概念がないところで、AKBの総選挙を知っちゃった人はどう考えるだろうか、ということですね。

ただ香港だけは自治が認められて、トップは香港人から選ばれ、地方議会もある。これは中国の中では極めて異例、例外です。

これは不自由じゃないんですが、あるデパートで、中国からの観光客が増えたので、いわゆる簡体字、今の中国の漢字で看板を書いたら、轟轟たる非難にあって降ろさざるを得なかった、ということもありました。香港では、こういうところに誇りは持っています。

「香港人とは何か」というのが難しいというのは、国籍は実に雑多なんです。生まれも育ちも香港で、もちろん中国人の顔をしていながらイギリス国籍を持っているとか、カナダ国籍を持っている、そういう例もありますし、七年住めば永住権を取得できるので、国籍は日本のまま香港に十年住んでいる人もいます。その人に「投票できるの」と言ったら、議員選挙の投票はできるんですね。つまり

4面から続く

七年住めば香港人ということなんです。ただ香港人の大部分は、中国から移り住んだ人の子孫です。

返還前はイギリス統治で、これももういと言えはるんですけど、イギリス統治時代は議会はなかったんです。返還することになって慌てて議会を作るようにしたんですが、行政長官の選挙は間接選挙です。親中派が大多数を占める選挙委員会（八百名）が選挙をするという形式です。

（議会にあたる）立法会には間接選挙と直接選挙があって、直接選挙で選ばれた議員の大多数は、いわゆる民主派です。間接選挙は大多数が親中派ですので、結果的には親中派が多数を占めるんですが、立法会には権限はほとんどない。議員立法ができないんですね。つまり行政

民主化運動―若い人たちの静かな熱気

二〇一七年に普通選挙にする中国、全年代が約束したんですが、結局「立候補は委員会承認したものに限る」となってしまった。これでは事実上、親中派しか立候補できないというので、抗議の座り込み運動が始まったわけです。最初は民主派議員とか、大学教授とか、大人たちが「金融街を何日か占拠して金融機関を麻痺させればいだろう」と言っていた。逆に現地の人は「そんなのできっこないだろう」と。

ところがいつの間にか、授業ボイコットから始まって、学生たちが政府庁舎前の道路を占拠して座り込みを始めたわけです。

日本では警察との衝突の場面ばかり、何度も報道されていて、私のところにも「危ないんじゃないか」とメールが来たりしたんですが、基本的に非暴力です。二日目の夜くらいに、警察が催涙弾を発射してけ人が出た、というのが一回。その時は、警察に対する非難の方が多かったですね。「香港人が香港人に対し

府が出してきた法律を審議するだけなので、拒否権くらいしかないんです。

ただ二〇〇三年に、いわゆる「国家保安条例」というものを作ろうとした時に、五十万人デモ―香港の十人に一人が参加した計算になる―が行われて、断念に追い込まれました。

「国家保安条例」というのは、いわゆるスパイ法案です。反中活動をした者を最高終身刑にしようという法律を作ろうとしたら、五十万人デモで反対され、さすがに立法を断念した。

また二〇一二年には、香港の公立小中学校で愛国教育、つまり親中教育を義務化するという法案を出したら、これも学生を中心とするデモによって潰された。とりあえず香港国内の問題は、そういうふうに向かおうと潰すことはできるんですが、今回はちょっと様相が違います。

て武力を使っているのか」と。ただ、こうした衝突は一日だけで、あとはずっと座り込みです。若い人たちの静かな熱気があります。

現地の新聞は「サマーキャンプ」と言っていましたね。特に学生は授業がありませんから、昼は授業に出て、夕方座り込みのところに行つて「イマジン」とか歌って、そこで寝て、また朝そこから学校に通う。一日おきに通うとか、二日おきに通うとか。昼間だったら四、五千人夜だったら二、三万人が常にそこらへんに座っていて、勉強をお互いに教えるスペースもあるし、ゴミ片付けとか、トイレ掃除とか、いろいろやっているわけです。

ただ学生が立ち上がったというのは、なかなか見られないことです。香港はイギリスと同様に、進学率が先進国にしては低いんですね。だいたい25%くらい、四人に一人しか進学できない。だから大学生というのは、香港ではいわゆるエリートです。日本より一人当たりGDP

は多いし、普通に就職すれば将来は約束されている人たちが、立ち上がって普通選挙を求める。

どうしてここまで広がったかについては、日本でもたくさん報道されていますから、別に私がここで付け加えることもないんですが、香港人の大多数は中国をルーツとしている漢民族なんですが、香港人としてのプライドがあるわけですね。

昔は経済的に圧倒的に有利だったんですけど。返還前の一九九五年時点で、香港は中国のGDPの28%を占めていた。大陸とは隔絶して、豊かでもあり力もあつたわけです。それが今は数パーセントになってしまった。中国にとっても、香港の経済的地位はそれほど高くなってきています。

昔は、「中国人はみんな貧乏で、香港人はみんな金持ちだ」という形でプライドを保っていたんですが、今は中国のマネーがどんどん入ってくる。中国の金持ちが香港の不動産を買いきるので、住宅価格はどんどん上昇して、若い人が手を出せなくなる。普通のマンションが一億円くらいします。もちろん香港人の給料は日本より高くて、かつ共働きしていますから、平均して二倍くらい豊かだとしても、さすがにそれは高いだろうという話です。

またかつては、日本人が香港でブランド物を買いきるという話がありました。今は中国からの観光客が大量に来て、宝石とかブランドものを買っていく。占領場所になった旺角（モンコック）というのは、中国人向けのブランド物の商店街で溢れかえっているところなんです。「何で旺角なのか」と聞いたら、「それは、中国の金持ちが買い物客に対する反発だ」と言いますね。

そのうえ中国人買い物客は、マナーが悪いんです。日本人とか西洋人は、基本的にボイ捨てしませんよね。私の近所に中国人観光客のバス乗り場があって、歩道橋があるんですが、そこに座って食べたりはポイ、食べてはポイ。それで「ここは中国人が来たんだ」と、すべわかる。

そういうことで、とにかく評判はすごく悪い。しかし、中国への経済的依存はもう進んでしまつて、そういう商店は中国からの買い物客で成り立つところがあります。

つまりお金で差別できなくなったので、今度は自由で民主であるということと、自分たちのプライド、香港人としてのプライドを保つと。さらに今の言論の自由とか、インターネットが自由に見られるとか、そういうものを失いたくない

ますます「若者らしく」

日本の若者

では、ひるがえって日本の若者はどうでしょうか。

最近、二つの調査を見て愕然としました。一つは、七か国の比較調査をした「子ども・若者白書」（内閣府）です。将来に希望がある、社会を変えられると思つている若者は、七か国中、日本が最低です。

日本、韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデンの比較ですが、「将来への希望」について、日本の若者は61・6%、五人に二人は希望がない。アメリカは91・1%と最も高く、韓国でも86・4%が希望を持っている。四十歳になった時のイメージも日本が最低、「社会現象が変えられるかもしれない」、「これも最低です」。

「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」も最低、「つまらない」「憂鬱」は最高というふうには、他の国に比べれば、およそ若者らしくないんですね。

次は、最近公表された統計数理研究所の調査データです。これも希望に關わるんですが、「努力しても報われない」が、若い人の間で極めて増加している。二十五年前と比べて、（20歳代以上の）全体として「努力しても報われない」が17%から26%に増えている。特に二十代、三十代の男性で、「努力しても報われない」という思いが、特に若い人たちを駆り立てているといえるでしょう。

彼らはイギリス占領時代を知らないし、豊かな中で育っているし、さらにリスクを取れる。これは一種のアイデンティティを求める闘争になっている気がします。これも意見があって、いわゆる経済的な格差闘争も含まれているという人と、純粹にアイデンティティ、自由を守るという政治闘争だという見方と、両方あるみたいですが。

なくなっている

深まる希望格差

「努力しても報われない」と思わざるをえない」という人が増えています。

これは世代別比較と年代別比較（1988年と2013年との比較）を組み合わせたものですが、「仕事や遊びなどで自分の可能性をためるために、できるだけ多く経験をしたい」という人と、「わずらわしいことはなるべく避けて、平穩無事に暮らしたい」という、どっちを選びますかと。

深まる希望格差

「努力しても報われない」と思わざるをえない

香港の地元新聞を読んでいると、やっぱり親の世代との対立が結構起こっているんです。親は「平穩無事が大事、お金をかけて大学に行っているんだから」と言うんですが、子供の方は、「私たちが行動しなくてどうするんだ」みたいに。

一方日本はどうですか。選挙でも投票率は若い人は最低、「社会は変えられる」と思っているのが、たつた三割しかない。諦めてしまっているわけですね。

私は二〇〇四年、ちょうど十年前に『希望格差社会』という本を出して、「努力しても報われない」と思つて若者が増えて

増えるだろうというのが常識的な考え方で、確かに一九八三年、今から三十年前は、若い人は「できるだけためたい」という人が80%、六〇代、七〇代で40%、37%、「平穩無事」というのも若い人が一番少なく、高齢者が多かつたんです。ところが三十年たつてみると、世代別にあまり変わらなくなつてきている。つまり、若い人で「自分の可能性をためたい」という人が減つて68%になり、逆に七〇代では51%に増えている。五〇代だと63%です。

続いて、「お金があれば、仕事がなくとも、人生がつまらないとは思わない」というのが二〇代で激増している。これは若い女性の専業主婦志向にも表れていて、仕事で自己実現というよりも、お金があつて楽しく生活できればいいや、と思つて若者が特に二〇代で増えてきているという話です。

社会のシステムに疑問を持って、希望にあふれて「社会を変えられる」と思つて行動する―それを若者・青年の定義だとすると、日本の若者は、世界の中で見ても、昔に比べても、若者らしくなくなつてきている、ということなんです。

きた、と言つたんですが、それが改善されるどころか、ますます「努力しても報われない」と思わざるをえない若者が増えてきている。

理由は二つあって、とにかくシステムの枠の中に入ることができない若者と、そこからほれ出る若者とと分断されている、ということなんです。「システムの枠に入ることができない」というのは正社員とその家族、「入れない若者」というのは非正規社員や正社員と結婚できない女性というふうには、若者が二つの世界に引き

5面から続く  
裂かれている。なおかつ、それが人生の早い段階で決まってしまうわけだ。

おそらく欧米の若者の状況は、日本よりはるかに悪いです。失業率も高いし、貧困状態にある人も多い、でも希望は持っている。日本の場合は、だいたい大学に入るか入らないかというところで将来が決まってしまう、さらに大学を卒業して正社員になれるか、うまく大きなところにもぐりこめるか、もぐりこめないかで、将来安定できるか、安定できない悲惨な状況に置かれるか、決まってしまう。

このように、人生の早い段階で自分の将来がかなり決まってしまう社会だと、ある新聞で書いたら、記者の人が「大企業だって倒産することもあるんじゃないですか」といいます。「少なくとも、私の卒業生で大企業に就職して倒産したとか、ひどい目にあつた人はいます」「中小企業に就職して、ひどい目にあつた人はたくさん知っています」と、言わざるを得ませんでした。

以前にも言ったことがあると思います、日航が倒産した時に、「ほら日航だって倒産するじゃないか」と言ったら、学生が「日航は政府が守つてくれるんですよ」といってわけです。つまり大学卒業の時に、とりあえずいいところに就職してしまえば、「あとほたぶん大丈夫」と、そつちうつちうつに思える社会なわけです。

結婚もそうです。この前イギリスで、婚活のプレゼンテーションをしてきました。日本では、若い正社員男性の数が不足している、女性は年収六百万とか八百万とかを求めただけで、そういう人は二割もない、だからそういう人を目指して婚活をしている人も多いと言ったら、イギリスの人は、「なぜ高収入の男性が少ないと知りながら、自分で働くこともせず、収入の高い男性を追い求めるんだ」と。イギリスらしい現実的な発想なんです。いや、日本は自分で働いている高収入の女性も、高収入の男性じゃなきゃダメと言います」と答えてました。

つまり女性にとつてみれば、とりあえず正社員と結婚すれば安心して子供を育てられるわけです。そうじゃなくて、正社員と結婚できなくて一人で育てるとか、非正規社員と結婚して育てるとか、そんなことは、正社員の数が少ないとわかっていってしたくない。そしてその挽回がききにくいとなると、婚活に走る。安定した世界に入りたいたいということでは、就活と婚活は似ているんです。

正社員とその家族になれそうなんというの、ある程度の企業であれば終身雇用なので、最近では「出世できなくていい」といいます。

この前びくびくりしたのは、東大卒の人が一種じゃなくて二種を受けてきたと。

### 保守化する若者と、夢の世界に生きる若者

日本では、正社員は長時間残業をせざるをえない一方、非正規社員や未婚者はどうなのかというと、バーチャルな世界が受け皿になっているわけです。じつは私はパチンコが日本社会の安定を保っていると思つていんです。つまり面白い仕事をしても、とりあえずお金があればパチンコをして、月に一回くらい当たりが出て、「俺はついでに」と思える。ゲームの世界も同様ですね。そういうバーチャルな世界で希望を満足させる。

あるいは、バーチャルなロマンスアイドル追っかけとかメイドカフェとか。JK産業って、聞いたことがありますか。女子高生と一時間お散歩して五千円、十分間手つないで千円、一時間手なら一万円払うんですよ。逆に言えば、彼女を口説いてリアルに恋愛をするよりも、一万円払つて女子高生の制服を着た人と手をつないで歩くほうがいいのか、あるいはそうせざるをえないのか。

ロマンスが現実にならずに、バーチャルなロマンスをバイト化しているという感じなんです。彼、彼女のいない未婚者や非正規雇用者が、日本では大量に出現しているわけですが、その格差が意識

話を聞くと、「キャリアになって活躍するよりも、(ノンキャリアなら)定時に帰って趣味や家庭を大事にできて、異動がない」と。キャリアになったら夜中の二時、二時に帰るのは当たり前ですからね。

面白いのは、香港にいて日本人駐在員は、みんなワークライフバランスがうまくできるんです。香港の支社に駐在すると、現地の人はみんな六時、七時には帰っちゃう。日本人だけ働くのはバカらしいと、独身の人は趣味に走る。「日本ではとてもできない」と言っていました。有給は全部取って、週末は海外旅行に行くなんていう生活が定着している。それでもちゃんと回っている、ということなんです。

されないのは、こうしたバーチャルな文化に浸っているからだと思います。最近では、こういう状況は後期江戸時代と類似している、と言っています。後期江戸時代というのは、身分制です。戦国時代は実力社会だったし、江戸前期の元禄時代は生産力が上がって、いわゆる右肩上がりだったんですが、江戸後期になつてくると生まれた時から役職も仕事もどこまで出世するかも、あらかじめわかっちゃつたわけです。

つまり生まれによって将来が決まってしまうという中で、楽しむといつたらバーチャルな世界しかないじゃないかというので、世界初の庶民文化が花咲くわけですね。吉原とか歌舞伎とか浮世絵とか。あと旅行ですね。今の日本のバーチャル文化とそっくりじゃないか、と思ひ始めているわけです。

その後は黒船に始まる激動で、いわゆる脱藩というのも起きます。坂本龍馬などのように安定した身分を捨てて、危機感を持って国を変えようとする若者がたくさん出てくるわけですが、これからの日本はどうなんでしょうか。今、日本企業の固定的な労働環境や年

功序列慣行に嫌気がさして、能力を活かしたいと望む若者たちが、仕事を求めて海外に移り住んでいる。そういう例は、香港にもたくさんあります。東大卒でわざわざ香港の会社に就職して活躍している人は、「日本には自分の能力を生かす場はないと思いました」と言っています。三十手前なんです。大きな案件をたくさん任せられています。逆に言えば、若いうちに自分のチャンスのためそうと思つたら、日本の企業に入っちゃったらダメみたいですね。

□第146回 東京・戸田代表を囲む会□

今の日本にとどまる若い人は、その真面目さや熱心さを就職活動で使い果たし、せっかくの創意工夫をパソコンゲームで使い果たしている、とみえるわけです。香港大の先生をやっていた人が、「子供の教育もあるので、日本に戻ろう」と日本の就職先に履歴書を送ったら、一通も帰って来なかったと言っています。英語とフランス語と日本語がペラペラで、大学で教えていて、イラストデザインも賞を取るくらいの腕前の人が、「もしや」と思つて、大学院卒という学歴を隠して大学卒で応募したら、引き合いがいっぱい来た。

それで日本に帰つて働いていたんですが、やっぱり日本の企業は息苦しいと。香港やシンガポールで働いている日本人に聞くと、例えばオーケストラの人は、

「日本にいると周りの人や上司などに気を使わなければいけないから、実力を発揮できなかったんだけれど、こっちにいると、のびのびと演奏できてうれしい」と。みたいな話をするんです。

日本の硬直した慣習やシステムは、若い人たちのエネルギーや熱気を削いでしまっているような気がします。今回の総選挙を見ても、「景気さえよくなりゃ、何とかなるだろう」という感じで、こうすれば若い人たちがもっと活躍できる、というビジョンを唱える政党がない。そういうところを変えてほしいと思つています。

(2014年12月10日。タイトル、小見出しとも文責は編集部。)

## 東京でも、地域から総選挙を語ってみよう

ゲストスピーカー 柿沢未途・衆議院議員

### かつてない厳しい選挙だった

維新の党の柿沢未途です、と言うより「江東区の柿沢です」というほうが、みなさんにはしっくり来るのかなと思つています。

今日は衆議院選挙を振り返って、ということですが、今回くらい厳しい選挙はありませんでした。

数字で言うと、私が八万八五〇七票、自民党の秋元候補が八万五七一四票、共産党さんが約三万票、無所属の方が八千票くらい、という結果です。「もうちょっと差がつくかと思つた」と言われるのですが、それもそのはずで、前回の衆議院選挙では、私は秋元候補に一万四千票差をつけています。加えてあの時は、民主

党を離れて「未来の党」から出馬した方が二万八千票(〇九年には十万票で小選挙区で当選)、そこにぶつつけられた民主党候補が二万九千票でした。つまり、私と秋元さん以外に五万七千票あつたわけです。

これはどちらかといえば野党票ですが、この五万七千票が宙に浮いている状態で、なおかつ自民党に一万四千票の差をつけていたので、今回も私が有利だと誰もが思うと思つています。それがこの状況ということ、それくらい東京で自民党が極めて強い選挙だと思つています。ひとつの要因としては、投票率が下がったことが挙げられます。江東区の場合、

二〇一二年は投票率64%で、これが今までの衆議院総選挙で最低の投票率でした。今回はそれをさらに8%下回つて56%(全国平均は52%)。前回に比べ、三万人くらいが投票に行かなかつたという計算になります。

もう一つは解散のタイミング、あるいは野党側の争点設定や選挙の準備が十分できていなかったことで、終始自民党ペースで選挙戦が戦われた。特に東京のような首都圏では、いくらアベノミクスがダメだといっても、その恩恵を受けている人が多いのが、二三区都心部です。「アベノミクス、悪くないじゃないか」という傾向があるのではないかと思います。

今回の衆議院選挙も、地方の小選挙区で野党側が勝つところが出てきている。7面へ続く

6面から続く  
方で、東京はどこか厳しかったと思  
ます。そういうことも影響して、江東区  
では野党側候補が私に一本化されたにも

### 民意がいつ、どのようなメッセージを届けるか。

### そこに、

解散した時点では、前回の結果もあり  
ますし、私自身もそれなりに国会の中  
も一定の注目をいただけるような活動  
してきたという自負もあり、また地元  
活動も精神的に行ってきたとも思っ  
ているので、前回以上に引き離して勝  
てるんじゃないかという思いでした。

そこで最初に作った法定ビラでは、「3  
つ星議員」「日本の政策作りを担う」  
というキャッチフレーズが書かれてい  
ます。つまり「私は優秀な議員で実績も  
上げていますから、ぜひ皆さん支持し  
てください」というスタイルのものです。

「3つ星議員」というのは、NPO法  
人万野党が国会議員の質問力、質問回  
数を評価して、3つ星、2つ星、1つ星  
と与えているものです。田原総一郎さん  
やロバート・フェルドマンさんといった  
有識者の皆さんに採点していただき、野  
党側の国会議員としては「有能だ」とい  
う第三者評価をいただいた、というこ  
とだと思うので、私はこれを今回の選挙の  
一つの「売り」に、当初はしていました。  
この頃はまた「解散には大義がない」  
とか、「七百万円も使って何をやってい

かわらず、二千八百票という僅差の当  
選となったという点でははないかと思  
います。

「なんだ」とか、こういうムードでもあり  
ました。たとえ消極的にせよ、安倍政権  
自民党に圧倒的な支持が集まるとは、ま  
だみんな十分に得心がいかないと感じ  
られていた時期でした。そういうことも  
あって、私自身のこれまでの実績と能力  
を強調するようなチラシを作りました。

そのうちに、新聞の情勢記事が出るよ  
うになります。告示直後の時点で「秋元  
と柿沢 横一線」。この書き方は、秋元  
さんがもうリードしているという意味で  
す。十二月十二日、投票日の直前でも「秋  
元と柿沢が、序盤から引き続き横並びの  
まま接戦」と。秋元さんとの差は開いて  
いる、という情報もあって、本当に「も  
うダメか」と思いました。

この情勢で、本命候補として戦うと  
いう選挙を続けているわけにはいきませ  
ん。国民の気持ちを掻き立てるような  
イシューを何とか設定して、選挙戦を通  
じて感じたテーマに選択と集中をしよう  
と。こう考えて作ったのが、この「怒」  
という表裏の法定ビラです。

これを投票日前の土曜日に、江東区内  
の新聞ほぼ全紙に折込でいれました。こ  
の作戦を決めたのは、最終日よりかなり  
前の段階です。民意は最後の二日か三日  
間くらいで動くだろうと、最近の選挙の  
傾向を見て思っていましたので、そのと  
きの状況を踏まえて、最後のチラシを作  
ろうと。これが結果的によかったですと  
思います。

選挙をやっている、「定数削減をやっ  
ていない」ことに対する怒りがあると。  
自民党に対して「やっぱり自分たちに不  
都合なことをやらないのか」、「増税だけ  
俺たちに押し付けて、自分たちはのう  
うとしているのか」という、怒りにも似  
た感情があると感じました。

またテレビ討論を通じて、江田さんも  
橋下さんも、けっこうそのことを言うも  
んですから、それがわれわれに対する注  
目になってきたという感じも持っていま  
した。ですから割り切って「定数三割  
歳費三割削減」という、私たちのマニフ  
ェストに書いてある身を切る改革を全面的  
に押し出す、ということに切り替えまし  
た。

最終日の折込は、表が、私がちょっと  
硬い表情で「怒」、「政治は誰のため  
にあるんだ」と書いてあって、裏面が「私  
が解決します」と、くっくか政策項目が書  
いてあるというものになりました。

期日前投票が増えているので、おそら  
く多くの候補者は法定ビラを製作したり  
配布したりするスケジュールを、前倒し  
していると思うんです。それを後ろ倒し  
にしたという意味では、私は珍しいケー  
スかもしれません。しかし私はやはり、  
最後に選挙結果を左右するのは、当日投  
票する有権者だと思っています。期日前  
投票もよくよく見てみると、無党派層の  
方々が期日前投票するならば、投票日に  
近いところのほうなんです。

この「最後に考える人たち」に、どう  
やって「自分を選ぶ」という投票動機を  
示すことができるか。これを考えるべき  
だと思っんです。メディアも発達してい  
ますし、投票に行こうという人は、豊富  
な情報をネットで取れるようになってい  
るわけですから、相当精査しているとい  
うのが、今の状況ではないかと思っ

ですから私は、民意がいつどういう形  
で動くか、ということをそれなりに考え  
ながらやっていた。そして選ぶ側の有権  
者は相当候補者を真剣に見ている、とい  
う感じを持っています。

そうはいっても、選挙戦の大半では当  
初に作った法定ビラを使っています。私  
がきちんと国会で取り組んできた、とい  
うことを知ってもらうためにも、このチ  
ラシをとにかく手渡しで配りきるとい  
うことを、徹底してやりました。もちろん  
私一人ではできません。支援者の皆さん  
に危機的状況を訴えて、協力していただ  
きました。寒空の下、年配のみなさんが  
スーパの前に立って一日中買い物客に  
ビラ配りをする、そういう部隊を作るこ  
とができました。

またこういうことをやっていたら、支

### 維新の党は健闘

私は今回の衆議院選挙は、与党側、安  
倍政権の勝ちというよりも、野党側の負  
けという結果だったと思っます。その負  
けをもちたしたのは何か。はっきり言え  
ば、油断と甘えだと思っます。

「なぜ選挙はやらなかったら」とい  
う油断、そして民主党と維新の党の候補者  
調整で言えば、「そこまでいきなりやる  
のは難しいよね」と、結局与党に対する  
対立軸、選択肢をほとんどの選挙区で一  
本化できなかった。そういうことが国民  
から見れば、野党側のどの政党も自民党  
に代わる選択肢として見ることができな  
かった、ということだと思っます。

維新の党にも、今から思えば非常につ  
らい要素がありました。まず、維新の党  
が結成されたのが昨年の九月ですから  
結党三ヶ月で解散されてしまっっている。  
特に私は、みんなの党から結いの党、そ  
して維新の党と動いてきたので、「あ、  
柿沢さんは今何党なんだっけ」と、相当  
言われました。「維新の党の政調会長を  
しています」と言っつと、「あんな、維新に入  
っちゃったの」と言われる。  
維新のイメージは、残念ながら東京で

援者の皆さんもほとんど熱が入ってき  
ますから、電話をかけるし、声はかけ  
るし、ハガキは書いてくださると。この  
二千八百票差というのは、本当に支援者  
の皆さんの運動の結果で、最後の直線の  
追い上げで鼻差で勝利した、と思っ  
ます。

今回の選挙は本当に「もうダメか」と  
も思いました。しかし、あんな寒い中  
で六十代とか、下手をしたら七十代の人  
が、私のためにやって下さっているわけ  
で、これだけやら本心に申し訳が立た  
ない。ですから私自身も、選挙が終わ  
ったときはヘトヘトでした。逆に言え  
ばそこまではヘトヘトでした。東京  
では野党が二勝二十三敗、この二勝  
のうちの一つになれたんだと思っ  
ます。

はそれほどいいものではありません。こ  
れはかなり誤解を受けた面があると思  
いますが、しかし誤解だと言ったって始  
まらない。「維新」に対するイメージ、  
そして橋下徹という政治家に対するイメ  
ージ、加えてそもそも政党を変わる  
というところに対するネガティブな見  
方、こういうことも非常にあったと思  
っます。

そんなことは選挙を通じて乗り越え  
られると、私たち自身はちょっと甘い見  
方をしていたように思っますが、私に  
対する「政党を渡り歩いている」とい  
う批判

### 改革政党としてのメッセージを打ち出した

### マニフェスト

「維新」と言えば、石原さんと橋下さ  
んのころのイメージで見るとは当然の  
ことですが、ちょっとイデオロギー的  
な皆さんは、次世代の党に行っしまわ  
れたわけです。しかし「維新」を名乗  
っている以上、維新の会の後継政党だ  
と思っられる以上、「どうせ、マニフ  
ェストにも右

ともあわせて、得票がそれほど伸びな  
かった要因にもなっているのではない  
か、とも思っます。私たちは「野党再  
編」を党是としていますから、これか  
らもそれを目指していくわけですが、  
このことは重要な教訓として考えな  
ければいけないと思っます。

一方で維新の党はどういう状態だ  
かと言えは、小選挙区で勝つのは江  
田さんだけだとも言われていました。  
大阪も、もしかしたら小選挙区は全  
敗で、全体として維新は議席半減だ  
ろう、こういうふう言われていたわけ  
です。それが結果としては、一つだけ  
減らして四十一議席と。思ったより  
よかったという感じを持った人が、  
ほとんどだと思っます。

東京においても八十万票あまり比例  
の得票をいただいて、民主党三、維  
新の党三、共産党三という結果にな  
りました。私も東京でおよそ比例は  
一だろう、それを私がとってしまった  
ら、他はもう誰も当選できないくら  
いの状況だと思っました。これは一  
本化できた選挙区は最後のところで、  
比例でも維新の党がグッと伸びた  
という結果だったと思っます。

これはおそろしく、前段で維新の  
党から苦しんだということも関係し  
ていて、選挙戦を通じて、政治や各  
政党に対する注目が高まるにつれて、  
維新あるいは維新の党に対する当初  
の考え方が、有権者の側で少し修正  
されたのではないかと思っます。

真実なことが書いてあるんだろう」と  
思っわれていると思っます。しかし  
マニフェストをご覧いただくと、ま  
ず「身を切る改革」というタイトルを  
前面に押し出している。かつて  
みんなの党、あるいは出だしの維  
新の会が大阪で志向してきたよ



柿沢未途 (かきざわ みと)

### 衆議院議員 (維新の党)

1971年生まれ。東大卒。NHK記者を  
経て、2001年東京都議会議員初当  
選(無所属→民主党)。都議2期。09  
年衆議院議員初当選(みんなの党・  
比例)、12年再選。13~14年結  
いの党、維新の党で政調会長。  
<http://www.310kakizawa.jp/>

7面から続く

うな、いわゆる改革志向の政策をかなり盛り込んでいます。

マニフェストは、私が中心になって書きました。次の四つのメッセージを柱に組み立てました。

「失われた『第三の矢』を、維新の手で」「身を切る改革」「徹底行革」を、維新の手で」

「忘れ去られた」社会保障制度改革を、維新の手で」「地方創生」は地域で決める、維新の手で」

まず、「失われた『第三の矢』を、維新の手で」「第一の矢」の金融緩和、異次元緩和はそこそこワークしたと、ここは肯定的に評価をするスタンスをとりました。「第二の矢」は公共事業へのバラマキで、これでもかこれでもかとやってきたけれど、未消化の残高がどんどん増えて、いくら予算を積んでももう限界です。そして将来的に成長できるような新しい産業を作る「第三の矢」の改革をできるか、これが一番注目されているわけです。

農業、医療、エネルギー、そうした分野で本当に改革と民間開放を行っていいか。まさにこれは自民党を支持してきたような団体の、その既得権益にメスを入れる改革ですから、自民党が最大の抵抗勢力になる。だから「第三の矢」が進んでいない。

「身を切る改革」を私たちがやるんだと書かせていただきました。これはもともと行革をやっている、われわれの売りだと思っ

「さらに私のこだわりとして、」社会保障制度改革」をひとつの柱とさせていた

「こうした人々の生活に寄り添ったテーマを持った政党でなければいけない」と

私は非常に強く思っていました。特にアベノミクスが、どちらかというと大企業寄り、マクロ経済寄りの、庶民の実生活とは遠い政策で、実質賃金の低下や物価の上昇によって、むしろ恩恵よりマイナスの痛みが押し寄せている。こういう状況だからこそ、われわれが「第三の矢」のような、アベノミクスみたいなことばかり言っていてはいけない。

安倍政権が強調しない社会保障分野における改革のプランを私たちは持っています、ということを強調することが大事だと思

「地方創生」で、またしても自民党政権はバラマキをやっているわけですから、それに対して地域に権限、財源、人間、「3gen」を移譲して、最終的には道州制を目指していく、というわれわれの方向性を書かせていただいた。この四本の柱で私たちは選挙戦を戦ったわけですが、最終的に有権者のところに一番刺さったのは、やっぱり「身を切る改革」だったと思います。

この「身を切る改革」に関しては、私たちに一日の長があったと思っています。マニフェストのなかにも、維新が変えた。維新だからできた。大阪府・市における改革の実績」と書かせていただきました。

国会議員の定数・歳費を削減する、なんて言うと、「また人気取りのパフォーマンスをやっている」と多くの方は思うと思います。しかし、今回橋下さんを本場に活用できたポイントは、ここだったと思っ

橋下さんの市長としてのハンドリングには、賛否両論あります。特に東京は、大阪のように実際を見ていないですから、東京まで届くニュースというのは大体何か変なことを言ったとか、問題になったというときです。だから申し訳ないけれど、東京では橋下さんにあまりいいイメージはない。

しかしちゃんと見ると、特に「身を切る改革」ということに関して実績を積んでいるんです。まず市長に就任した時に自分の給料を四割もカットしている。そ

のうえ退職金―一期四年務めると、四年ごとに四千万円もらえる―を、いきなり八割カットして、なおかつ報酬審議会でゼロの答申を出した。今度橋下さんが市長を辞める時は、退職金ゼロですよ。ね。こういうことをやっているわけ

定数削減についても府知事時代に、当時、維新幹事長の松井現知事と組んで、強行採決までやって定数二割削減、百九から八十八ということをやっているわけ

これによって一人区の選挙区が増えて、維新の会は今度の統一選で過半数を取れるかどうか危うくなっているんです

与党に対抗しうる野党、という選択肢をつくれるか

この選挙を経て、民主党が七十三、維新の党が四十一、あわせて百十くらい

出ないし、一本化すれば、有権者にとって政権の受け皿にならないような状況でも、これだけの支持が示されたわけ

私自身が小選挙区で当選できたのも、やはり民主党がここで候補者を立てな

多いタイプだったと思います。元は民主党ですし、社会保障改革、年金あるいは同一労働同一賃金など、民主党支持者の

この「身を切る改革」についても、実際にやったことをバックデータとして持ちながら、安倍政権が口だけ言っていてできなかったことと対比する、というスタイルをとっています。

こういうマニフェストを作ったわけですが、どのくらいの人がマニフェストを見たのかといえは、そんなに見ているとは思

政策みたいなものが前に出ている維新の会の時代とは、トーンが違ふな」と感じ

皆さんに支持していただけるようなメッセージを、ポイントを絞って発信してき

地元活動を通じていろいろな面識を得ていた民主党の区議会議員の人たちも、

また忘れてはいけないのは、私の選挙区での民主党の比例票が二万四千票、維

何が言いたいかというと、候補者一本化によって民主党は比例の票で、やはり

は、考えなければいけないと思います。

これは労働組合がどうだ、こうだということではなく、こういう犠牲を払いながら協力関係を結んだということ

今行われている民主党代表選挙では、「維新の党との距離の遠さ」みたいなことを競い合っているような感じがあります

私たちは、連合とも政策協議をやることになりました。民主党には公務員改革

今回のマニフェストには、「公務員人件費の二割削減」と書いてありますが、こ

権を取ったマニフェストにはそう書いてある。ですから民主党が、労働組合も応援する改革政党としての原点に立ち返

質疑

東京でも、地域から総選挙を語ってみよう

【後援会のつくり方】

出陣式では、地区ごとの「〇〇柿沢会」とか「柿何とか会」というのぼりが多数

大抵の場合、後援会組織というのは一本化

柿沢 〇九年の衆議院選挙で、私はみんな

ていただければ、乗り越えられないような大きなハードルは、さほどないと思

それが成りして、三百小選挙区に立派な候補者を立て、一対一の勝負をする

今回の選挙から汲み取った教訓と、また政策的な論点、そして民主党との共闘

なりの党・東京ブロックで復活当選しました。じつは全国の復活当選組の中で、惜

敗率が下から二番目でした。小選挙区で

当選した東洋三議員が十万五千票、落選

された自民党の方が八万票あまり、私が

私の体験からいうと、後援会活動は頭



8面から続く

数の多さよりも、むしろヘッドになる人を何人作れるか、が大事なような気がします。つまり「お山の大将」を何人作れるかということですね。地域で「俺は、柿沢未途の後援会長だ」という人は、地域に貢献したいというまじめな心も持ちながら、一方で自分のやりがい、生きがいも求めている方だと思います。そうした方々に「後援会長、お願いします」というと、「そうか、俺がやらなければいけぬのか」と本当に一生懸命がんばってくださる。

「何かか」という職がはいって出ていて、びっけりされるかもしれないが、それぞれの会は、会合で集まるのは十人とか二十人くらいです。だから「お山の大将」なんです、でもその人たちは明らかに熱心になるし、壇上上がった「何とか後援会の会長、誰々さんです」と紹介されれば、回りで見ている人も「俺も作ればあなるのか」と思うじゃないですか。そうやってお山の大将を増やしていく。

何百人もの後援会をひとつ作るよりも、十人の会を自作するほうが、明らかに選挙の集票にはプラスであると思います。じつは元々は、これは父である柿沢弘治が始めたやり方です。それで「地盤看板、カバンなし」、新自由クラブなんていう小政党で、今から四十年前近くの東京の下町で選挙活動を始めたわけで、何にもない中でやっていった手法を、私なりに作り直してやっています。

やはり私がこんな不利な戦況の中で、小選挙区で勝つという結果を得ることができてくるのも、「私はもうずっと、柿沢さんを応援してきました」という人たちが投票してくださった。この基盤があるからだと思います。

ですから長く耕してきた土壌が存在していること、もう一つは政策論とそれを訴えて認知をいただけるような、無党派層に対する活動一朝はもちろんだ、終電まで駅に立ったり、両方が組み合わさって今回の結果が出ていると思っています。

ます。

【マンション、無党派層へのアプローチ】  
柿沢 江東区は特に豊洲を中心にマンションがどんどんできて、毎年一万人ずつくらい人口が増えている状況です。そうしたところは、昔であればポスティングなんですが、今はもうマンションではポスティングもできないんですね。最終日に折込をやったのも、折込という方法でしか配布物をマンション住民に届ける手法がなくなってしまった、ということがあるんです。

じつは今日お配りした新年のチラシを、あさって成人の日新聞折込するんです。これは初当選したとき、つまり二〇一〇年からずっと毎年成人の日に入れているんです。定性的にやることによって、政治に関心のある人であれば成人の日だから柿沢さんの折込が入っているのかな、と想像していただけるかもしれない。

いずれにしても一つは、まともな内容のチラシを定期的に折込込むことが、けっこう大事なんじゃないかと思えます。お金はかかりますが。

それと、実際に質感を持って私という人間を見て認知してもらうのは、これは駅に立つしかありません。逆に言えば、駅というのはすごく効率的で、呼び集めてもないのにみんな通っていくわけですから、これをサボることはありえない。選挙前はみんな立ちますから、選挙前によっても全然ダメです。暑い日とか寒い日とか、通勤する方々も「何でこんな日に行かなければいけないんだろう」と思うような日に立っていてこそ、「ああ、がんばっているんだな」ということがあるわけです。

あと、もし新人候補でどうしたら無党派層に浸透できるんだろうと思うのなら、これは徹底的にやるべきだと思います。夜終電まで立つことですね。特に九時を過ぎて終電までの時間帯は、みんな疲れ果てて帰ったりして帰って帰る。その時に、朝駅に立っていた人が夜立っていたら、これは感動しますよ。

私もやってみて、すごいなと思います。暗いところで一人で立って「柿沢未途です」「お帰りなさい」と言うわけですね。みなさん目の前を去っていくんですが、なかにはわざわざ戻ってきて「がんばってください」と握手したり、「コーヒー買って来ませう」とかいう人がいますから。これは、ぜひやられた方がいいと思います。

それと、何だかんだ言っても、特に下町は宣伝カーで回ることですね。「こんなもの、うるさいって、何の意味もない」というご批判もいたくんですが、しかし何というか、回っていると「がんばっている」という感じを持っていただけけるケースは、やっぱり多いように思います。基礎的な知名度をアップさせるには、宣伝カーという活動はやっぱり欠かせないように思います。

地回りだけを一生懸命やっている人はなかなか評価されない、というのが最近の有権者の傾向としてはあるだろうと思えます。しかし自身の評価はどうか、与党であることは評価をされるというのが、私が感じるところですね。そこは非常に毎れないものがある。政治は権力を取って、自分の政策を実行して何ほです。から、やっぱり与党であるというところ、もう少し真剣にハングリーにならないければいけないなと思うわけです。

野党側がそれにどうやって伍していくかと言え、やっぱり中身と活動密度と両方やらなければいけない。それをやっている人が、全く無名の新人から知名度を上げて、五年がかりで小選挙区当選にこぎつけるみたいなことが、どんどん起きてきていると思えますね。

これは、首長選挙もそうやってきているような気がするんです。優秀な人が夢を持って首長選挙に挑戦する。でも大体一回目は負けるんです。そこから四年、歯を食いしばって、あきらめずにやってもう一回出ると、今度は大サプライズが起きたりする。そういうことが、最近の首長選挙でも起きているような気がします。

その人が何者であるのか、本当に有能なのか、本気でやる気があるのか、体力があるのか、こういう政治家として成功する資質をじつと有権者の皆さん、特に投票する有権者の皆さんは見ているんじゃないかと思うんですね。

いい時も悪い時も、本当にきちんとやっているのかどうか。これは二ヶ月、三ヶ月で見極めることはできないので、やっぱり四年間とか五年間やれるかどうかというのが、とても大事だと思います。そういう意味でも、私は有権者は極めてよく見ていると思いますので、無党派だろうが、地付きの人だろうが、取るべきアプローチは結局はそんなには変わらなと思います。

【地方議員との関係】

柿沢 地方議員のみなさんには、本当に助けられました。私のところには、維新の党の党籍を持った議員が四人います。元々はみんなの党で五人当選して、一人残念ながら与党側に行っちゃいました。新たに無所属の方が一人参加していただいている。それと今回は、民主党籍を持っている四人の方が参加していただいた。さらに維新の党の立候補予定者、総勢十人の体制で戦うことができました。

この方々は、ご自分の支持者に対するアピールと、もちろん選挙のプロです。江東区のプロですから、選挙運動を組み立てるに当たって、ものすごく役に立つ存在になってくださる。こうしたことも、地域において私の票が出ている要因になったと思えます。

これも利害で結びついている人間関係というのは、やっぱり弱いなあと思いますが、「自分の選挙、プラスになる」「ならない」という打算は、それぞれあるかもしれない。自分が、やっぱり野党ですから、私が差し上げられるようなメリットはそれほどないわけですね。だとすると、何で結びつくか。これはハートと努力なんだと思うんですね。

さんは当たり前前に働いてくれるもんだ、みたいな感覚を持つ人もいますが、これは全く間違いです。別にその人がお給料を払っているわけではないし、それぞれ民意を得て当選し、区民の皆さんの税金から報酬を払われているわけです。独立した一國一城の主として、気持ちよくご支援いただけるような状況を作れるかどうかというのは、こちら側の人間力にかかっていると思えますね。

【マニフェストのイシュー設定】

柿沢 統一地方選の場合はとくに、まずマーケティング・リサーチから始めなければいけない部分があるのではないかと思えます。自治体それぞれによって、住民のみなさんが関心のあるテーマは違ってしまう。

大規模公共事業が予定されていて、それを本当にやるのかやらないのか、というところもあれば、江東区のようにどんどん人口が増えて、保育園も小学校も足りない、というところがある一方で、お年寄りばかりが住んでいる状態になっているニュータウンの集合住宅をどう再生するか、が焦点になっている自治体もある。こういうところを一律に語ることはできないのではないかと。

そこはやっぱり有権者とか、選ぶ側の心理に寄り添うことが大事で、それにはまずマーケティングリサーチが必要だろう。国政選挙ですら、沖縄ではまったく全国的な傾向とは真逆な民意が出てくるわけですから、ましてや地方選挙においてをや、ということではないかと思えます。

そうした中で共通項があるすれば、これも人気取りのパフォーマンスではなくて、本当に意味のある形で身を切る姿勢みたいなものを議員がどうやって示せるのか、ということがあると思えます。基本的には財政再建と歳出削減、負担増、こういうことを求める時代になっている。このときに、それを求める側が自ら厳しい姿勢を見せなければ、やはり信頼を失うでしょう。信頼を失うというのは、反対投票が出るというよりは、「も

うどうでもいらい」という無関心の広がりになっていくんじゃないかと思うんです。

残念ながら、政治家は口ではもっともらしいことを言っているけれど、結局最後は自分の身を大切に、本当に覚悟をもってやらない、そのくせ都合が悪くなると負担増を押し付けてくる、こういうふうに関われていると思えますね。

そういうなかで、どうやって自分に厳しい姿勢を見せるか。私、よく街頭で言うんですが、民間企業で何か不祥事とか社会問題化するようなことが起きた場合、まず役員は報酬をカットするわけですね。そのうえで、社員にお願いをするというのが、基本的な手順だと思うんです。われわれには、お願いをする側として身の正し方があると。これだけの活動費が必要とか、言い訳をしているようでは、やっぱりいけないのではないかと思います。

これは、ポピュリズム的と言えばポピュリズム的かもしれませんが、しかしポピュラーセンチメントに訴えかけるのも、私たちの役目の一つです。社長の報酬を二割カットして会社の業績が上がっているんですか、と言え、上がないかもいいものではないかと思えます。

このことを、「本当にやりそうだ」と思えるような形で訴えられる政党が、今度の統一地方選挙は勝つと思います。ですから、維新の党はけっこう有望だとひそかに思っています。

不安要因はまさに投票率の低下で、「維新の党だっとうせやらないだろう」と思っている人の方が多いと思えますから、「せうではないんだ」ということをどうやって見せていけるか。今の段階では、そう感じています。

いずれにしても、自治体の財政にせよ、国家財政にせよ、国民の皆さんに痛みを伴う歳出削減や負担増を求めざるを得ない時代を迎えている、ということ意識して、政策を作って打ち出していく必要

□日程のお知らせ□

- ◆「日本再生」読者会・東京(会費 無料)  
2月8日(日) 午前10時より  
「がんばろう、日本!」国民協議会事務所(市ヶ谷)
- ◆越谷「日本再生」読者会(会費 200円)  
2月9日(月) 午後7時より 白川秀嗣事務所
- ◆船橋「日本再生」読者会(会費 300円)  
2月10日(火) 午後7時より 船橋北口みらい図書館
- ◆北九州「日本再生」読者会(会費 500円)  
2月17日(火) 午後7時より 小倉商工会館
- ◆京都・青年学生読者会(会費 無料)  
2月10日(火) 午後7時より 同志社大学寒梅館
- ◆大阪「日本再生」読者会(会費 500円)  
2月6日(金) 午後7時より ドーンセンター

\*\*\* 以下は事前のお申し込みが必要です \*\*\*

- ◆「がんばろう、日本!」国民協議会 第七回大会 第五回総会  
『住民自治の涵養・地域主体の地域再生』の視点から、  
統一地方選の問題設定を共有する  
2月22日(日) 午後1時から6時  
「がんばろう、日本!」国民協議会 事務所(市ヶ谷)  
問題提起 廣瀬克哉・法政大学教授 ほか

- ◆第25回 戸田代表を囲む会 in 京都  
『住民自治の涵養・地域主体の地域再生』の視点から、  
統一地方選の問題設定を共有する  
2月23日(月) 午後6時45分から9時 コーブイン京都  
参加費 1000円

- ◆第147回 東京・戸田代表を囲む会  
「ローカルから、政治をとらえなおす」(仮)  
3月2日(月) 午後6時45分から9時  
「がんばろう、日本!」国民協議会 事務所(市ヶ谷)  
参加費 同人1000円/購読会員2000円

- ◆第一回社会サロン at 京町家  
「京町家でソーシャルイノベーションを語る」(仮題)  
メインスピーカー 今里 滋・同志社大学教授  
3月9日(月) 午後6時半～ 江湖館  
会費:実費(事前登録制)

- ◆「がんばろう、日本!」国民協議会 第八回大会  
6月21日(日) 連合会館(旧総評会館)  
記念シンポジウム 午後1時から5時 参加費 2000円(予定)  
懇親会 シンポジウム終了後 参加費 未定

■問い合わせ 03-5215-1330

があると思います。

9面から続く

【地域再生は地域自治で】

柿沢 (地方では)「橋下さんみたいな首長はっかりではない」という意見には、私は同意できないですね。それは、地域の方々が地域の自治体のリーダーを、まだまだ真剣に選んでいない証拠なんじゃないかと思つたんです。

霞ヶ関で机の上で計画を作っているエリートよりも、現場でいろんな試行錯誤をやっている国民、市民、普通の人たちの方が、何百倍も知恵を持っていて、現場を良くしようという汗を流していると思つています。その方々の知恵を生かして、自分たちで責任を持って取り組めば、地域が良くなったり悪くなったりするとう実感を持つれば、やっぱり地域のリーダーの選び方も変わってくるのではないかと思つています。

それは理想論だと言われますが、しかし戦後の高度成長を見ても、そもそも国の計画でよくなった企業なんて、ほとんどないですよ。親方日の丸みたいな企業の代表格と言えば、日本航空とか東京電力、あるいは今は民間企業になった日本

郵政とか、惨憺なるものじゃないですか。一方でソニーも松下もホンダも、こういう戦後の代表格とも言えるような企業は、その辺のおっちゃんが始めた企業ですよ。

僕は、地域の中にそうしたことが出来る人たちが、パブリックマネジメントの世界でもたくさんいるんだと思うんです。

確かに町内会などは旧弊な体質で、会計ルールもちょっとあやふやですし、人事の体制も問題が多い、高齢化もしている。そういう意味では、河村市長が名古屋でやろうとした地域委員会でしたか、コミュニティごとにお金をつけて意思決定を住民に委ねるといふことをやろうとして、残念ながら頓挫したんだと思つています。残念ながら頓挫したんだと思つているようになったらいいな、という漠たるイメージは持っています。

いずれにしろ、上から、遠くから計画を作って、「その通りやりなさい」といって下ろしていくスタイルでは、もう地方は創生しない。逆に地域の皆さんが、自分たちで考えて「これをやろう」と本気で取り組んでくれるようになる、その能動性を引き出せるようになれば、誰も考

えつかなかったようなアイディアが津々浦々から広がっていく。これは隠岐の島の海士町とか、そういうところが教えてくれている教訓だと思つたんです。

そういうふうに変えていくには長い時間かかるでしょうし、本当のことを言うところ「地方創生」なんていう、何度も違う言葉で言い古されてきたようなやり方ではなくて、本当に地域に権限、財源を下ろしていくという、長期のプランを作っていく必要があるんじゃないかなと思つています。

区議選に挑戦されるといふことですが、区議会議員といふのは、その中でもとても重要な存在になると思つています。議員といふのは、突然選挙で選ばれて、地域コミュニティに発言権を持つ立場になるわけですから、「自分がやりたいこと」といふより、まずは地域の中で信頼されて、「〇〇さんが言うなら」といふ立場を獲得するところから始まるのではないかと、この感じがします。

(1月10日。タイトル、小見出しとも文責は編集部)

1面から続く

「2025年問題」をはじめとする、これからの超高齢社会を乗り切ることが不可能だろう。これは、21世紀の課題先進国にふさわしい自治、へのチャレンジでもある。

自治分権の関係性は、多様性を広げるとともに分断を拒否する

2015年は「テロ」と「格差」という重いテーマで幕を開けた。私たちは、より注意深くならなければならない。いずれのテーマでも「正義」を掲げて敵を叩く、という二分法に陥らないように。

「私はシャルリ」というプラカードを掲げて、人々が守ろうとするものは何か。

たとえば、デモに参加したある家族は、「わたしのところは夫はカトリックのフランス人ですがわたしはユダヤ人。娘の名付け親はモスリムで、いっしょにデモに来た友はプロテスタントの牧師なんです。それがいまのフランスなのよ」「こんなに違った煮のようなフランスで

違った煮のような家族だから、わたしたちはお互いに寛容であるしか生きていけないのよね。だからわたしたちは寛容のためにデモに来たのよ」(春昌オランダ・ハーグより) 特別編『わたしはシャルリ、きみは? Je suis Charlie, et tu?』メルマガ Japan Mail Media 1/16(発行より)

これは、西欧社会の価値観(表現の自由とイスラム社会の宗教的禁制との「文明の衝突」)でもないし、「テロとの戦争」でもない。自らの「正義」を掲げて「敵」を叩くというのは、消費者民主主義にはうってつけの分かりやすい「回答」だろう。しかしそこから、"違った煮"(前出)のように多様化した現実の生活、人間関係は「ないもの」にされてしまう。そんな空間は息苦しいし、生き難いはずだ。

「911の後、『我々の味方か、それともテロリストの味方か』という幼稚な宣言を覚えているだろうか? けれど今、新たな恐ろしいテロ攻撃を受け

て、あなたはブッシュのスローガンを焼き直したようにみえる。言論の自由に賛成か、反対か。「シャルリー・エフド」でないなら、自由を憎悪する狂信者だと。略々そんなことはやめてほしい。テロリストに立ち向かっているつもりなのだろうが、実際には、あなたは分断と悪魔化という、テロリストの血塗られた術中にはまっている。「イスラム教徒として言おう。『言論の自由』原理主義者の偽善にはもう、うんざりだ」メフディ・ハサン、ハフィントンポストより)

グローバリ化によってヒト、モノ、カネの流動性は飛躍的に高まり、社会の多様性、複雑性も飛躍的に高まった。フランスではすでに、イスラム教徒が人口の7%を占めている。イスラム教徒の若者の多くはフランスで生まれ、フランス語を母語とするフランス人だ。一方でグローバリ化によって、格差や差別はより可視化される。侮蔑的な風刺画は、彼らにとっては数多くの社会的不満のなかの一部にすぎなかったのではないかと。

問題はこう設定されるだろう。「『違った煮』のような社会とそこで格差を、分断の固定化・対立の原理でコントロールするの、それとも連帯の再構築の原理でマネージするのか」と。

「21世紀の資本」を著したピケティ氏はこう述べている。「私は資本主義を否定しているわけではなく、格差そのものが問題というつもりもありません。ただ、限度がある。格差が行き過ぎると共同体が維持できず、社会が成り立たなくなる恐れがあるのです」(毎日2014/11/19夕刊)

は別の互酬や再分配という関係性が解体されていく様を「悪魔のひき回」と表現した。そして、こうした市場経済化は必然的に「社会の自己防衛」という対抗運動を生み出すと。

第二次グローバリ化が行き詰まりを見せる今、世界大戦に帰着した第一次脱グローバリ化の教訓のうえに、どんな明日を展望するか。

新自由主義の代名詞でもあるサッチャー首相は80年代に「社会など存在しない、あるのは国か家庭か個人だ」と主張した。それは、さまざま関係性が織りなす社会なるものを解体し、個人はバラバラな存在であることを強いられる。あるいはさまざまな違いを「ないもの」として、ナショナリズムでまとめあげられる。「違った煮」のような社会を、こうした分断の原理でコントロールするのか。

生活領域が市場経済原理に覆われて(カネに換算できないもの)価値がない、社会の具体的なイメージが一旦削ぎ落とされてしまったときに、「社会なるもの」をどう再構築するのか。これが、私たちが立っている地点ではないだろうか。

「国や地域をつくるのは連帯なので、選挙ってというのはその連帯を生むための手続きだという感覚がないとダメですよ。じゃないと、いつまでたっても消費者マインドから抜け出せない」(木村 前出)

連帯を生むための場づくりや営みを、具体的に目に見えるところから、「顔の見える関係」のなかから創りだす多様性を広げるとともに分断を拒否する自治分権の関係性を創り出そう。

2/22総会、統一地方選、第八回大会を通じて、かような問題設定、そのためのハードル、課題などを共有しよう。